

知見を結集して
地域活性化のイノベーションを
興おこしていこう。

東北電力 地域づくり支援制度

まちづくり 元気塾[®]

Contents 活動事例集 Vol.10

- P 4 岩手県上閉伊郡大槌町「ままりば」
- P 6 宮城県東松島市「有限責任事業組合まざ〜らいん」
- P 8 福島県河沼郡湯川村「勝常区環境保全会」
- P 10 新潟県胎内市「坂井活性化実行委員会」
- P 12 集合研修型まちづくり元気塾
マスターコース2018 in 仙台

夢のままでは終わらない。
今、地域の人々と知見を結集して
まちづくりは新たな時代へ。

お問い合わせ先

東北電力株式会社
広報・地域交流部 地域共生グループ
〒980-8550 仙台市青葉区本町1丁目7番1号
Tel 022-799-6061 (直通) 受付時間 / 9:00 ~ 17:00 ・土日祝日を除く
Fax 022-227-8390
Mail s.genkijyuku.ka@tohoku-epco.co.jp

東北電力では、まちづくり元気塾へのご意見やご感想をお待ち
しております。上記お問い合わせ先までお寄せください。

- まちづくり元気塾[®]の活動などはホームページでもご覧いただけます。
HP. <http://www.tohoku-epco.co.jp/genki>



まちづくり元気塾

検索

- まちづくり元気塾[®] プロモーションビデオ公開中。
支援を受けられた方々の声をお聞きください。
YouTube. <https://www.youtube.com/channel/UCG4KK1iSIFOTRaWehDWxAQ>



東北電力 YouTube

検索

より、そう、ちから。
東北電力

※「まちづくり元気塾[®]」は、東北電力の登録商標です。※本記載記事・写真を了承なく転載することはご遠慮ください。

2019年7月発行



東北電力 地域づくり支援制度

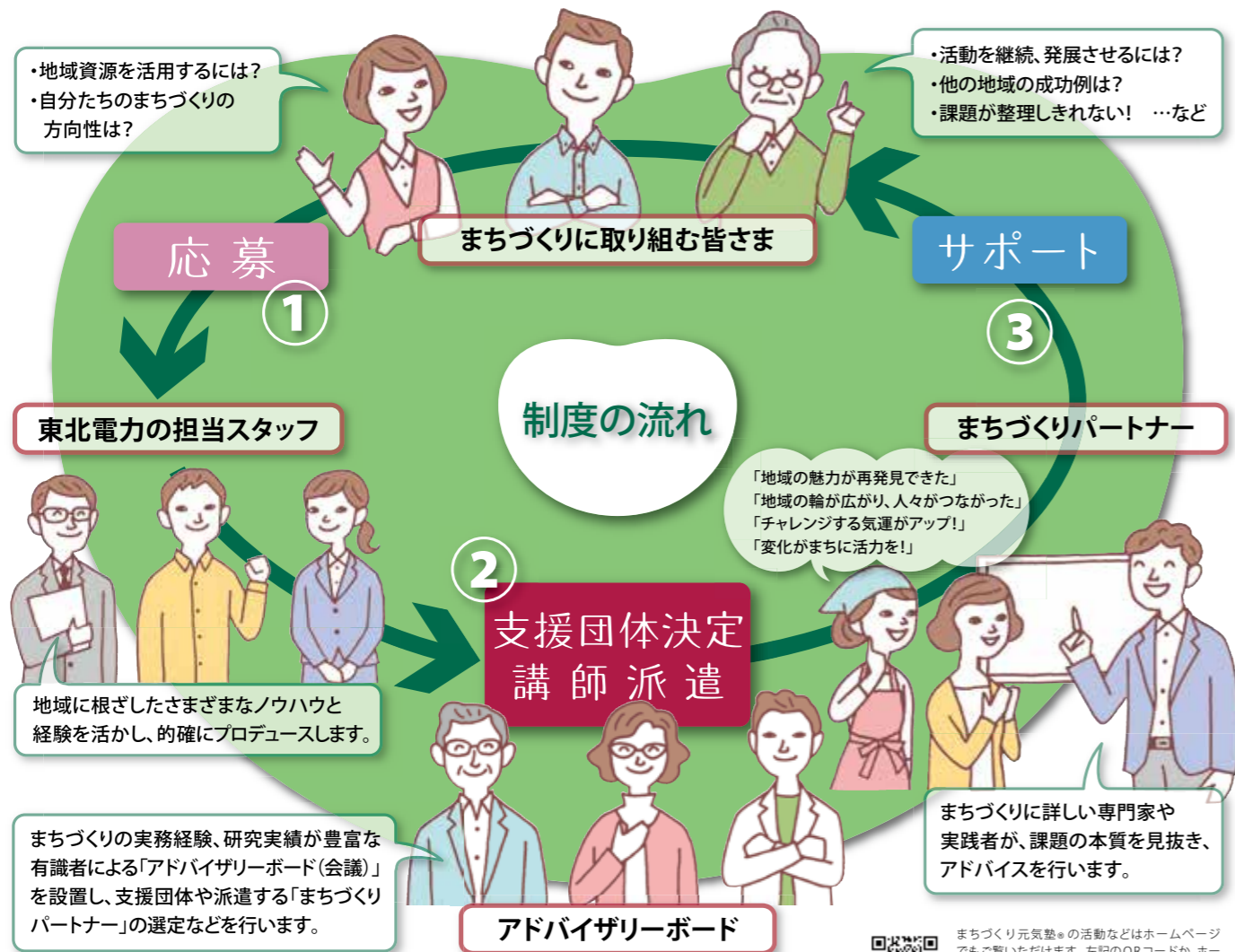
まちづくり 元気塾®

東北電力は地域に寄り添い個性あふれるまちづくりをサポートしています。

「まちづくり元気塾®」は、地域の活性化に取り組む団体を支援する制度です。2006年度以来、東北6県と新潟県で36の団体を支援してきました。この活動事例集では、2018年度に支援した4団体の活動と、集合研修型まちづくり元気塾「マスターコース2018 in 仙台」を紹介します。

制度の特長

- まちづくりの専門家や、全国各地で地域づくりを実践されてきた方々を「まちづくりパートナー」として派遣する制度です。
- 講演並びにワークショップや検討会を通じて、「まちづくりパートナー」が地域のニーズや課題に寄り添った実践的なサポートを行います。
- 活動の内容を東北電力のホームページや広報誌などでご紹介します。



まちづくり元気塾®の活動などはホームページでもご覧いただけます。左記のQRコードか、ホームページで検索してください。

まちづくり元気塾 検索

東北電力 地域づくり支援制度 まちづくり元気塾®

プロモーションビデオ公開中!

東北電力は、「まちづくり元気塾®」の取り組みをより多くの皆さんに知っていただくため、プロモーションビデオを制作しています。当社ホームページおよび当社公式YouTubeチャンネルをご覧ください。



まちづくり元気塾®のプロモーションビデオは、左記のQRコードか、ホームページで検索してください。

東北電力 YouTube 検索



福島県郡山市「柳橋町内会」 ロングバージョンのビデオより 20分9秒

福島県郡山市
「柳橋町内会」 [long.ver]
 「柳橋町内会」が、まちづくり元気塾をきっかけにさまざまな知恵を出し合い、農家レストラン「舞の里けやき亭」をオープンさせた、感動と発見、喜びに満ちた軌跡を紹介しています。



地元のお母さんたちの「やる気」が原動力に。



地域を元気にするには、どうしたら良いか？



「答えは身近なところにある」との提言が。



食資源を活用しよう！と議論が盛り上がる。



その土地ならではのものを、その土地の方法で！



「食」に特化したワークショップを開催。



地元食材を活かした新メニューが続々誕生。



夢が叶い、農家レストランがいよいよオープン。

まちづくり元気塾® その他のYouTubeコンテンツ



まちづくり元気塾
「紹介ムービー」
 まちづくりパートナーや支援団体のインタビューを通して、まちづくり元気塾の制度概要を紹介しています。



福島県郡山市
「柳橋町内会」 [short.ver]
 まちづくり元気塾をきっかけにどのような気持ちの変化が生まれたか、農家レストランのオープンを果たした「柳橋町内会」メンバーそれぞれの思いを紹介しています。



秋田県藤里町
「特定非営利活動法人 ふじさと元気塾」
 「特定非営利活動法人 ふじさと元気塾」が、地元大学生とともにまちづくりに取り組んだ様子を紹介します。



岩手県宮古市
「宮古観光創生研究会」
 「宮古観光創生研究会」では、地元の若手経営者らが中心となり、宮古市の観光振興について議論しました。



新潟県新発田市
「一般社団法人新発田市観光協会」
 「一般社団法人新発田市観光協会」は、歴史資源を活かした賑わいづくりに向けた取り組みを行いました。



まちづくり元気塾イメージソング
「ここにあるもの」
 まちづくり元気塾イメージソング
 「ここにあるもの」(青谷明日香 作詞・作曲)

テーマ ママの力で地域を元気にするプロジェクト

実施概要

- 第1回/ 話題提供とワークショップ
「被災地域におけるままりばの社会的意義とその可能性」
[2018年4月21日(土)～22日(日)]
- 第2回/ 話題提供と商品づくり・事業計画策定
「事例に学ぶ、商品開発について～わたしが輝く、まちがきらめく商品をつくらう!～」
[2018年7月10日(火)～11日(水)]
- 第3回/ テストマーケティング結果報告とワークショップ・ビジネスプラン再検討
「心を伝える売り方ワークショップ」
[2018年10月25日(木)～26日(金)]

- ◎開催場所/ 岩手県上閉伊郡大槌町 大槌町中央公民館(第1回)
吉里吉里公民館(第2回)
大槌町文化交流センターおしゃっち(第3回)

【参加者】

- ◆支援団体
ままりばの皆さん、大槌町の皆さん
- ★まちづくりパートナー
柳井 雅也氏(東北学院大学教養学部教授 チーフパートナー)
稲葉 雅子氏(株式会社ゆいネット代表取締役)
- 東北電力株式会社
釜石営業所 所長 有川 増博
釜石電力センター 所長 赤塚 重昭



シビック・プライドを胸に抱き 地域と活動を結ぶ事業を起こそう。



チーフパートナーから

「始まりはいつも小さい」けれど。

●柳井 雅也氏

「始まりはいつも小さい」。これは哲学者キケロの言葉です。小さなアイデアを大きく発展させるには、最初が肝心だと教えています。ままりばの活動をより持続的にするには、地域資源の再発見・活用や商品開発・事業化など、メンバーが未経験の分野にどんどん挑戦する必要があります。その際に



大事なのは、やはり最初の一步。ボタンの掛けちがえがないよう、一緒に考えていきたいと思えます。

地域資源を活かした事業展開が 持続的な取り組みを可能に。

東日本大震災によって甚大な被害を受けた大槌町吉里吉里地区。一変した環境の中で、子育てママの心が休まる場所を作りたいとの思いで、ままりばは設立されました。「ままりばサロン」と名付けられた拠点で月1～2回、ワークショップや体験講座を行ってきましたが、活動をさらに広げ、ママの力で地域の元気を生み出していくため、まちづくり元氣塾との連携が始まりました。

柳井氏は第1回の冒頭、ままりばは社会的な使命感を持ち、復興途上にある地域の人々を結びつけてほしいと語りました。併せて「シビック・プライド」という言葉を紹



参加者一人ひとりに笑顔で語りかけながら課題解決のアプローチを探る稲葉氏(左)

介。これは地域の人々が「自ら能動的に地元を変革する意思」を表しています。社会性をベースにすれば仲間やアイデアが集まり、シビック・プライドがあれば活動に淀みなくなると強調しました。

続いて、稲葉氏が「活動からビジネスへ」をテーマに、講話とワークショップをア

「コミュニティ・場・稼げる商品」が 地域に根ざすために必要な3要素。



が。熱気のコもったやり取りが繰り返されました。

テストマーケティングでは、本命の「アロマストーン」が売れず、他の商品が売ってしまったとの報告が。稲葉氏は販売現場のディスプレイが原因ではないか、と指摘。実際に会場に商品を並べてテストマーケティング当日を再現し、意見交換を行いました。検討を重ねて稲葉氏が好ましいディスプレイに修正しながら、販売ノウハウを伝授。さらにもっと吉里吉里地区らしさ、ままりばらしさを出せるよう、商品やセールストークに独自のストーリーを与えようとアドバイスしました。

柳井氏は全3回のまとめとして、地域に根ざして活動していくためには①地域を



氏のリードで改めて検証し、方向性を確認。稲葉氏の講話では、商品開発の基本とノウハウが紹介されました。ワークショップでは、売り手と買い手の視点の両方を持ちながら、その商品がどのように作られ、伝えられ、なぜ選ばれ、支持されていくかという「事前想定」を明確にするためのディスカッションを。検討に当たっては、数多くのチェック項目も設定。初日は①商品イメージ、②売価と原価、③顧客と販路、④生産と管理について。2日目は①商品の仕様確定と試作、②コストと出資・体制、③スケジューリングについて、各々意見を出し合いました。パートナーも話し合



自分たち「らしさ」を伝えるための ストーリーと共に、行動を始める。

第3回は、テストマーケティング実施後に開催されました。メンバーからは、実践経験をもとに、より具体的な質問・意見

参加者からひとこと

海も、メンバーも、キラキラに!

●ままりば

小川 麻里子代表

当初、地元の魅力は何?と聞かれても思いつかなくて。海がキラキラきれいじゃないですか、と先生方からご指摘が。その時、地元を見直す、地域と結びつけて大切なんだと気づきました。それからは商品作りや販売など挑戦の連続に。課題もたくさ



ん見つかる傍ら、メンバーがキラキラしてきたんです。このような変化を、まち全体に広げたいですね。



三陸鉄道リアス線吉里吉里駅にほど近い「ままりばサロン」が活動の拠点

いの輪の中に。疑問点や要調整ポイントは、その場で検証・確認されていきました。

数々の商品を検証した結果、癒しのアイテムである「アロマストーン(アロマオイルを垂らして香りを楽しむ石膏の造形物)」の商品化が有望とされました。そこで実践経験の獲得と事業化推進のため、テストマーケティングを実施することに。第3回開催前に、近隣地区で開催されるマルシェ(手づくり市)で作品を販売するため、メンバーはさっそく準備に取りかかりました。

テーマ 特産物を活かし、交流人口を増やす元気な地域づくり

実施概要

- 第1回/ 事業視察と講話・ワークショップ
「たくましい地域をつくるために人はどう動くか」
[2018年5月20日(日)～21日(月)]
- 第2回/ ワークショップ
「具体的なプロジェクト選定に向けたワークショップ」
[2018年6月11日(月)]
- 第3回/ 事業視察と講話・ワークショップ
「実施プロジェクトの決定と具体的な実施方法策定に向けたワークショップ」
[2018年7月23日(月)]

◎開催場所/ 宮城県東松島市 小野上地区センター

【参加者】

- ◆支援団体
まぎ〜らいん、東松島市地域おこし協力隊の皆さん 他
- ★まちづくりパートナー
菊池 新一氏(認定NPO法人遠野山・里・暮らしネットワーク会長 チーフパートナー)
宮原 博通氏(有限会社地域環境デザイン研究所所長)
- 東北電力株式会社
石巻営業所・石巻電力センター 所長 菅井 翼



意見交換では、地域にあるものや人材を活かすアイデアをピックアップ。これらをもとに、具体的なプラン構築を目指すこととなりました。

「らしさ」を忘れず、より具体的に地域に役立つ事業を考えよう。

第2回では、新しい活動のためのアイデアをさらに具体化するワークショップを実施。第1回で抽出されたアイデア群を①ものづくり、②生きがい・遊び場づくり、③暮らし

ここがポイントだね？そうだった？
意見交換しながらアイデアをふくらませる



環境の改善、の3テーマに分けて練り込み、より具体的なプランづくりを進めました。地域おこし協力隊員から若者ならではの斬新な意見も出され、議論は白熱。ものづくりの分野が最も有望とみなされました。地元産品の情報や各地の事例を参考に話し合う中で「乾燥機を用いたドライ商品」を軸に事業化を図ろうという機運が高まりました。

菊池氏から、事業化してもその土地らしさがないと魅力がない、まぎ〜らいんの「らしさ」とは、女性ならではの母親ならではの視点だろう、というアドバイスが。宮原氏からは、新規事業は作り手と買い手と地域社会の



まぎ〜らいんが運営する惣菜店「ちょこっと惣菜結びや」は地域の住民たちに人気のスポット

三方にとって良いもの、すなわち「三方よし」を目指すべきとの指摘もありました。まぎ〜らいん会員から、主婦が1日に2時間だけでも働けて、収入を得ながら仲間とおしゃべりも楽しめるような環境を築きたいという意見が出るなど、新しい事業が徐々に形を整えはじまりました。

新たな活動情報を発信し「共鳴者」を増やしながら進もう。

第3回では、地域社会への貢献を念頭に、新規事業とスケジュールを実施レベルまで考えるワークショップを行いました。宮原氏は地域にあるもの、地域に根付いているものや人を活かすほど、無理のないまちづくりが実現すると指摘。パートナーたちも参加して議論を重ねた結果、地域内に

成熟したまちづくり活動をもう一度活性化し、次世代へつないでいこう。



地域に根付くもの・人材を活かすと小さなリスクで事業が伸びる。



チーフパートナーから モデルケースを作りあげたい。

●菊池 新一氏
まぎ〜らいんは、既に10年以上活動を続けてきました。高齢者向けのお惣菜販売や、ピクルスなど独自商品の開発にも実績があります。しかし、まちづくりというものは10年も続ければメンバーもそれだけ歳をとり、閉塞感も出てきます。こういった「勤続疲労」は、いずれ日本中のまちづくり団体共通の課題になるでしょう。メンバーと共に、現状を打破るモデルケースを作りあげたいと思っています。

300年後の子孫たちに 笑顔を贈るための工夫を。

まぎ〜らいんはメンバー全員が女性のグループ。東日本大震災で甚大な被害を受けた東松島市で、高齢者向けのお惣菜や地場産品を使ったピクルスなどの開発・販売を続けてきました。ところが、復興が進むにつれ、取り組みのあり方にも変化が求められるように。スタッフの高齢化もあり、将来ビジョンが不透明となってきました。まちづくり元氣塾ではこれらの課題を受け、活動の再活性化と次世代への継承を図るため、計3回ワークショップを実施しました。

ワークショップには、東松島市の地域おこし協力隊メンバーや自治体職員など若者も多数参加。第1回では、女性主導で成功し



ワークショップでは、笑顔の宮原氏が議論を盛り上げしっかり着地点へと導く

た活動事例を菊池氏が紹介し、メンバーに刺激を与えます。宮原氏は時代の変化に対して先手を打つには、長期的な視点が必要と指摘。地域のシンボルになっているお寺を300年後に修復するため、300本のケヤキを植えた取り組みが紹介されると、感嘆の声があがりました。参加者全員による

自生するヨモギなどを素材に、社会的ニーズの高い「健康」をテーマにした商品開発・販売チャンネルの強化が最優先されることに。最終的には、新規事業の広がりによって住民が健康になり、東松島が健康に良い地域として評価され、交流人口や移住者が増えていくことを目指します。素材に加えて、施設や設備も既に地域にある乾燥機や遊休施設を活用するなど、具体的に無理のないプランができあがりました。

菊池氏は、これらのプランをリスクの小さいすばらしいものであり、あとは商品開発の詳細を詰めるだけ、と高く評価しました。宮原氏は、事業化を速やかに推し進めるには、さらに多くの人を巻き込むための情報発信が必要と指摘。SNSなどを通じ



斬新なアイデアや大胆な意見が発表されると大きな拍手や笑いがわき起こる場面も

た外部への展開も大切だが、むしろ地域の高齢者や小学生と畑仕事などの共同作業を通じてウィンウィンの関係を築き、地域の中に「共鳴者」を増やすことを考えてほしいと強調しました。最後に参加者に向けて菊池、宮原両氏が今後も見守り続けることを伝えて、全3回が終了しました。

参加者からひとこと やるべきことが見えてきた。

●有限責任事業組合まぎ〜らいん
三浦 美和子会長

東日本大震災を挟んで10年以上活動してきました。近年は手応えがある反面、長く続いた活動の今後に不安を感じていました。でも今回、地域おこし協力隊や自治体の若手と一緒に考えたり笑ったりしたら、身の周りにもたくさんの方のチャンスがあるとわかってきて、やるべきことが具体的に見えてきました。新事業プランは、どんどん進めていくつもりです。



テーマ
今後の勝常地区のあり方について(農業基盤の充実を目的に基本的な構造改革の実施を図る)

実施概要

●第1回/現地視察とグループワーク

「勝常地区のために自由に使える
100万円があったら、どうするか？」
[2018年6月2日(土)～3日(日)]

●第2回/ワークショップ

「プロジェクト案の絞り込みと実施に向けた
具体的検討」
[2018年8月25日(土)～26日(日)]

●第3回/ワークショップ

「勝常収穫感謝祭の振り返りと勝常地区の
これからのまちづくりに向けて」
[2018年11月23日(祝)～24日(土)]

◎開催場所/福島県河沼郡湯川村 勝常公民館

[参加者]

◆支援団体

勝常区環境保全会の皆さん、湯川村地域おこし協力隊の
皆さん 他

★まちづくりパートナー

橋立 達夫氏(作新学院大学 名誉教授 チーフパートナー)

寺川 重俊氏(有限会社寺川ムラまち研究所 代表取締役)

岡崎 昌之氏(法政大学名誉教授 アドバイザリーボード座長、第3回)

■東北電力株式会社

会津若松支社 副支社長 木村 一郎

会津若松支社 副支社長 井関 智



な話し合いは①景観整備(勝常寺参道の
黑板堀化など)、②イベント・ツアー開発
(地元産の新米をふるまう祭りなど)、③生
活環境向上(集落内にある店舗の共同売店
化など)の3テーマでプロジェクトを進め
る方向にまとまりました。

女性の参画で伝統料理が復活
新たな風が地区に吹き始める。

勝常地区には勝常寺の祭祀に関わるさ
まざまな行事や芸能、おもてなしの文化が

伝統的なおもてなし料理の復活を試みた
女性参加者が苦労話を披露



伝わってきました。
第2回ではこ
うした地区の伝
統・風土の中か
ら将来に向けて
のヒントを見つ

けるため、ワークショップを実施。また前回
の意見をもとに、女性メンバーが勝常地区
の伝統的なおもてなし料理を再現、試食会
を行いました。

ワークショップで年間行事について情報
交換した際「豊作祈願祭は毎年行っている
が、収穫への感謝・御礼はしていない」との
気づきが。それまで「新米をふるまう祭り」
として模索してきたイベントを、勝常寺と
ご本尊の業師如
来のご加護への
感謝を表す「勝
常収穫感謝祭
(以下感謝祭)」
として具体化す



地区の風土や文化の源流となる勝常寺は
業師如来坐像ほか計3体の国宝を安置

ることとなりました。

また、試食会でのおもてなし料理は大好
評で、地区の方から「懐かしい味と再会でき
た」といった声も。その結果、感謝祭で
お客さまに提供する方向で調整が始まり
ました。

これらの取り組みは、勝常地区に住む一
人ひとりが共有できるよう会報で周知さ
れ、感謝祭に向け、地区全体が動きだしま
した。

勝常地区らしさに磨きをかけ
人・暮らし・祭りを新たな宝に。

第3回は感謝祭終了直後に実施。勝常寺
の特別御開帳や地元産新米の販売、伝統料
理おふるまいなどを視察したパートナーと、勝
常地区の皆さんで意見交換を行いました。

まちづくりは「地域の総力戦」で。
できる人が、できることから始めよう。



チーフパートナーから

元気で魅力ある暮らしを見つけよう。

●橋立 達夫氏

勝常地区の基幹は米作りを中心とした
農業。でも支えているのは、ほぼ高齢者。10
年後はどうなるのでしょうか。まちづくり元
気塾では、勝常地区の歴史と文化を切り口
に、人と暮らしに着目します。元気で魅力あ
る暮らしをする人が住む土地になれば、農産
品の価値も自ずと上がります。勝常地区の住



民にとっても、都市
部の人たちから見
ても、夢のある集落
になるにはどうす
るか。未来を一緒
に探りましょう。

いろいろな立場の地区住民が
思いを共有できるようにしよう。

会津盆地の中心に位置し、会津地方随一
の米どころとして有名な湯川村。勝常区環
境保全会は、農業活動を通じて地域づくりに
取り組んできました。まちづくり元気塾
では、村のシンボルであり、国宝の仏像3体
を有する「勝常寺」を中心としたまちづくりに
ついて、議論を行いました。

第1回の冒頭、橋立氏と寺川氏は、まず
「まちづくり」は地区の個性や魅力を伝える
「総力戦」が必要と指摘。農家のみならず、
いろいろな立場の住民がひとつになって地区
の魅力は何かを考え、「協働作業」ででき
る人ができることから始めようとして力説され
ました。



参加者の小さな「気づき」を取り上げ
より大きなアイデアへと導く寺川氏

ワークショップでは「勝常地区のために
自由に使える100万円があったら、どうす
るか？」というユニークな設問が。参加者
からユニークな意見が次々と出される一
方、ワークショップ後半で女性メンバーも
合流。地区の行事や伝統料理などについて、
女性目線の情報も寄せられました。活発

豊作祈願祭があるけど感謝祭は？
気づきから生まれた新しいイベント。



岡崎氏は、伝統料理を提供した女性陣を
讃え、勝常地区にはおもてなしの底力があ
ると評価。運営にあたった方からは「勝常
寺が特別に御開帳してくれ、改めて深い
つながりを実感した」「子どもも年寄りも同じ
目標に向かう機会が持てた」など、喜びの
声が上がりました。一方で「高齢者の誘導や
広報など、やってみてわかった課題も多い」
という反省も。寺川氏は、みんなでコミュ
ニケーションを深めればすぐ改善できるは
ず、とエールを贈りました。

翌日、寺川氏からは、より勝常地区らし
さを磨くことが重要との指摘が。橋立氏は、
若い世代の巻き込みと、地区住民をつなぎ
合わせるような「小さなビジネス」が有効と
提言しました。



感謝祭には地区の子もたちが訪れ
竹灯籠づくりに挑戦する光景も見られた

これらを踏まえて、①勝常地区らしい景観
整備、②健康をテーマにした情報発信・商
品開発、③農業高校・大学との連携、④茶屋
兼よろず屋の「協働」経営などを進めること
に。勝常寺という存在を活かしながら、勝
常地区ならではの人や風土を新たな宝物
に育てていくことを全員で確認しました。

参加者からひとこと

いままでなかったものが生まれた。

●勝常区環境保全会

兼子 光右前代表

まちづくり元気塾を契機に「勝常収穫感
謝祭」が誕生。準備はたいへんでしたが、大
勢の方が来てくれました。勝常地区がこれ
ほど一体となったイベントは、いままでな
かったはず。特に女性陣の貢献に助けら
れました。自分たちでやり切ったという



感動は、地区の中
に新たなノウハウ
と誇り、何よりコ
ミュニケーション
を生み出してくれ
たと思います。

テーマ
美しい田園風景と美味しい里山の幸を活かした地域おこしモデル構築

実施概要

- 第1回/ 現地視察と話題提供・ワークショップ
「元気な坂井をつくるワークショップ」
[2018年5月25日(金)～26日(土)]
 - 第2回/ 現地視察とワークショップ
「元気な坂井をつくるワークショップ」
[2018年7月14日(土)～15日(日)]
 - 第3回/ 状況報告とワークショップ
「第2回まちづくり元気塾以降の状況報告と楽雪イベントに向けた検討」
[2018年11月23日(金)～24日(土)]
- ◎開催場所/新潟県胎内市 坂井公会堂

- 【参加者】
- ◆支援団体
坂井活性化実行委員会の皆さん、地域の皆さん、新潟食料農業大学の皆さん
 - ★まちづくりパートナー
志賀 秀一氏(株式会社東北地域環境研究室代表 チーフパートナー)
役重 眞喜子氏(花巻市コミュニティアドバイザー)
 - 東北電力株式会社
新発田営業所 所長 築井 豊



①伝統菓子「^{でんじあめ}傳次飴」の復活、②坂井越え(旧街道ルート)ウオークツアー、③地域の拠点施設「里の駅」づくり、④雪を楽しむ「楽雪」イベントと4つの有望テーマに整理されました。

「拠点づくり」に狙いを定め
アイデアをプランへ具体化。

第2回は、前回に整理した4テーマそれぞれの進捗状況の確認から。「傳次飴」の試作品が披露され、アイデアが徐々に形にな

時には笑い声を響かせ課題に取り組む地域の皆さんや学生たちとパートナー。



り始めていました。各テーマを検討した結果、地域の拠点施設「里の駅」づくりを議論の中心

に取り上げ、アイデアを具体化することに。さっそく現地視察を行って現況や周囲の環境を把握、ワークショップでより実現可能なプランの検討を行いました。

志賀氏からは、地域の拠点をより魅力的なものにするには、単に品物を販売する場所ではなく坂井の特色を見せる施設にする努力を忘れないよう助言が。役重氏は、選ばれなかったアイデアを捨てずにとっておけばいつか役に立つ。選ばれたアイデアも、どう使うか誰がいつやるのか、きちんと決めな



産直施設「里の駅 いちべえ」としてリスタート
茅葺き風の屋根は若者たちがデザイン。

いと具体化できないと強調しました。2日間に渡る議論から「里の駅」は、遊休施設を改修し、特産品や「傳次飴」の販売所、休憩スペースとして活用する方向に決定。施設の名称・外観のデザイン、トイレ・加工場の整備、開店スケジュール等も話し合われました。

坂井の魅力をもみんなが共有し
自分たちの言葉で伝えよう。

「里の駅」は、第3回に先駆けてプレオープン。第2回以降、インターン生の尽力によりプランが一挙に具体化しました。名称は建物の持ち主の屋号から「いちべえ」に決まり、施設改修も着々と進行。茅葺き風の仕上がりは、坂井の皆さんにも大好評。プレオープンでの売り上げも、これまでの取り

住む人たちが、好きだと言えるまち。
人々は、そんなまちにやってきます。



雪の多さを嘆いたりしない。雪を楽しみ
雪に感謝できるのは、坂井ならでは。



チーフパートナーから
一人の百歩より、百人の一步。

●志賀 秀一氏
もし、よその人が坂井を訪れるとしたら、何を目的にやってくるのか。そこをまず考えたいですね。坂井には、棚田もあれば清水もあり、猿や鳥もいます。地域おこし協力隊や学生たちの若い力も加わりました。坂井をこれからどうしていくか、大いに議論を重ねましょう。みんなで未来像を創りあげることが重要。「一人の百歩より、百人の一步」を合言葉に、坂井をリスタートさせてい



坂井の人・風土の根本は何か？
ワークショップで掘りだそう。

新潟県胎内市の坂井地区では人口減少が進み、40歳以下の農業従事者はほぼゼロに。地区の再興を目指し、区長や農家組合長たちは地域おこし協力隊と共に坂井活性化実行委員会を立ち上げました。まちづくり元気塾では、棚田や里山を活かした観光客誘致や地域活性化の拠点、独自商品づくりに挑戦。都市部の学生を受け入れる里山インターンシップのインターン生や地元の新潟食料農業大学の学生も参画し、地区の皆さんとワークショップに取り組みました。

第1回は、志賀氏の講話でスタート。住民自らが地域の良さを見つけ、共有し、総力



話し合いの中から浮かび上がった「拠点づくり」その候補地を視察し、さらにイメージをふくらませる。

戦で未来に向かおうと訴えました。役重氏からは、坂井の人材や風土・文化は、何を根本にしているか把握しようとの提案も。

学生たちを交えて、ワークショップは活発に展開されました。坂井の「強み(長所)」と「弱み(課題)」を洗い出し、次に活性化のためのアイデアを抽出。さらに絞り込ま

組みの中では最高額を記録しました。一方で、課題も一層明確に。売り上げはどこまで望めるのか、坂井らしさのある商品がないと固定客は確保できない、などの意見が第3回のワークショップで出されました。

役重氏はこれを受けて、コンセプトをしっかりと固めてからスタートし、後から迷いや不安が生じては決してぶれないようにとアドバイス。志賀氏は、施設の目的やあり方を地域の人材や風土・文化は、何を根本にしているか把握しようとの提案も。

坂井地区などの山間集落と海側集落の子どもたちの交流を図るために企画された楽雪イベントについても具体化が進み、かまくら作りや竹スキー、雪合戦など、実施す



次々と披露されるアイデアを活かしながら具体的なプランを組み立てる役重氏。

プランの詳細な検討が行われました。「地域の魅力とは、まず住む人が自ら楽しむもの。訪問者にはお裾分けしてあげるもの。坂井では雪の恵みである清水が棚田を潤すと考えて雪に感謝し、雪の楽しさを訪問者と共に味わおう」と志賀氏からエールが寄せられました。

参加者からひとこと
熱い思いとパワーと支援が一体に。

●坂井活性化実行委員会
坂上 良夫実行委員長
「里の駅 いちべえ」が動きだしました。坂井のみんなの思いと、集まってくれた若者のパワーと、まちづくり元気塾の支援が一体になったおかげです。でも、これからが肝心。持続的に成果を出すには、イベントも商品開発も情報発信も、もっと知恵を絞らなければ。これからも若者たちと連携しながら、自分たちでやることを増やしていきたいですね。





アドバイザーボード座長の岡崎氏が進行役



和やかな雰囲気の中さまざまな意見が飛び交う



ユーモアたっぷりにエピソードを披露する志賀氏



菊池氏は実体験に基づく先進事例を熱く紹介



全国各地のユニークな取り組みを紹介する橋立氏



柳井氏は緻密な分析で活動の方向性を導く



パートナーのコメントに熱心に聞いている参加者



複雑な問題でもわかりやすく丁寧に解説する寺川氏



今後への期待と課題を参加者に語る役重氏



実施概要

日時／2018年7月31日(火)
 場所／宮城県仙台市 東北電力本店ビル 1E会議室
 実施内容／①「2017年度支援団体活動報告」
 ②「全員参加の元気塾会議」
 テーマ／「人口減少・少子高齢化時代における若者の地域づくりへの参画、地域で活躍する人材創出・後継者育成に向けて」

- ◆参加団体
- 農事組合法人湯の郷[岩手県花巻市 2017年度支援団体] 4名
 - 甲子柿を守る会[岩手県釜石市 2013年度支援団体] 2名
 - 特定非営利活動法人能代観光協会[秋田県能代市 2017年度支援団体] 4名
 - 特定非営利活動法人ふじさと元気塾[秋田県山本郡藤里町 2016年度支援団体] 1名
 - とよま絆の会[宮城県登米市 2017年度支援団体] 3名
 - 登米・南三陸フェスティバル(登米中央商工会)[宮城県登米市 2013年度支援団体] 1名

- 城下町高田花ロード実行委員会[新潟県上越市 2017年度支援団体] 3名
- 以上7団体18名

- 【参加者】
- ◆まちづくりパートナー
- 岡崎 昌之氏(法政大学 名誉教授、アドバイザーボード座長)
 - 志賀 秀一氏(株式会社東北地域環境研究室 代表)
 - 橋立 達夫氏(作新学院大学名誉教授)
 - 柳井 雅也氏(東北学院大学教養学部教授)
 - 菊池 新一氏(認定NPO法人遠野山・里・暮らしネットワーク会長)
 - 寺川 重俊氏(有限会社寺川ムラまち研究所代表取締役)
 - 役重 眞喜子氏(花巻市コミュニティアドバイザー)
- 東北電力株式会社
- 本店広報・地域交流部副部长 今田 広志 他8名、岩手支店、秋田支店、宮城支店、新潟支店 各1名 計13名



お互いの顔が見える会議で交流も深まる

生産年齢の減少がより大きく影響すると指摘。また、近年、都市部の若者が農山漁村に興味を持つ傾向が高まっていることに言及。そういった都会の変化を地方で敏

る人も出て、地域が盛り上がることから、そういったターゲットを意識した地域づくりを仕掛けていくことが大切と話しました。

役重氏は自らの経験談として、若者に対しては、「上から目線で見ないで、彼らの立場になって、どうすれば楽しいかということを一生命考えることが大切」とコメント。花巻市で美しい棚田を見ながらのんびり走ろうというイベントを企画した際に、実行委員の若者たちに気づかれないよう、地域の年長者がこっそりサポートしたというエピソードも紹介しました。

●地域の人を呼び込むために効果的な情報発信とは。

第2の論点として「地域の魅力をどう発信していくか」が挙げられました。

まず、橋立氏がマイナス面を発信するユニークな事例を紹介。地元ではマンパワーが足りず大きな課題となっていた竹やぶの整備を、マイナスからプラスに発想して「楽しめる有料体験イベント」として都市住民にPRしたところ大盛況に。いまや都市と農村の継続的な交流事業に発展したというものです。寺川氏は秋田県内の大学生グループと連携したところ、SNSやクチコミでの情報発信に大きな力を発揮した事例を紹介。若者には若者が得意な分野をまかせると、従来のしがらみを離れた展開がより期待できると話されました。

役重氏は、情報発信は地元の人から語るのが最も効果的と述べつつ、地域の魅力を他人に伝えることは容易ではない、とも言及。観光客のリピーターを増やすためには、まずは毎年帰りてくる孫や親戚など身近な方に対して、自分の地域の新しい魅力を積み重ね伝え、リピーターにしてほしいとアドバイスしました。

●カッコいい大人がいれば若者たちが地域に集まる。

次に、第2のテーマ「後継者(若者)をどのように集め、地域に残ってもらうか」について意見交換を行いました。参加者から、若者が地域に残りたくないような育て方が大切ではないかと提言されると、パートナーからもさまざまな意見が出されました。

菊池氏によると、遠野の中学1年生に地元のすばらしさを話しアンケートを取ったところ、ほとんどの生徒が「初めて聞いた」と回答。おそらく親も先生も伝えていないのだろうし、こういう子どもたちは地域に残らなくて当たり前、と憂慮するお話が。一方で、幼いころから郷土芸能(神楽)に参加していた子どもが、「地元に残って神楽を続けたい」と想いを語りだしたため、地域で就職のお手伝いをしたという好事例も。橋立氏からは、音響技術に秀でた「カッコいい大人」がいたためにその土地が輝いて見えてきて、若者たちが吸い寄せられ、やがて定住した事例が、それぞれ披露されました。

柳井氏は、若者であれ年長の移住者であれ、その人に「場」が与えられれば、自分でなんとかしようと努力する、というお話が。この時、若者と地域を熟知する人材の2者だけではなく、両者をつなぐ「インタープリター(翻訳者)」が不可欠と強調しました。これらの情報提供をきっかけに、参加者からの質問が相次ぎ、最後まで活発な議論が続けられました。

議論を終えた参加者からは、「いろいろ刺激を受けた。これから頑張っていきたい」「自分も『インタープリター』を目指したい」などの感想が出され、会議は盛大な拍手で終了しました。

都市部の若者は農山漁村に興味あり。地域づくりの担い手を 地元はどう集めるか。

①「2017年度支援団体活動報告」

支援後の成果や、新たに生じた課題を共有するために。

●支援後も広がり、深まる取り組みをパートナーが再チェック。

「マスターコース」は、これまでにまちづくり元気塾に参加した方々が一堂に集い、悩みの共有やネットワークを構築しながら、課題解決の糸口を見つけていく集合研修型の元気塾です。

「マスターコース2018 in 仙台」には、2017年度にまちづくり元気塾が支援した4団体はじめ計7団体18名と、まちづくりパートナー7名が集まりました。

前半は、各団体から、まちづくり元気塾が支援した「その後」について報告がありまし

た。能代観光協会は、支援を契機として組織づくりを継続し、各方面と連携して「能代市観光まちづくり会社」の設立を目指していると報告。支援時に担当した菊池氏は、支援終了をスタートと位置付け、商工会議所等とネットワークを広げている点がすばらしいと高く評価しました。また、9町が合併した登米市で活動を続ける、とよま絆の会からは、旧町がそれぞれで問題を解決する傾向にあり、地域間協力が足りないとの悩みが。これには志賀氏が「隣は仲間」という意識を育て、パートナーとして来訪者を「共有」するのが基本、と助言を行いました。この他、各団体からそれぞれの進捗状況に即した報告や相談も。パートナーは活発に情報提供や助言を行いました。

②「全員参加の元気塾会議」

まちづくりに共通する課題・悩みについて、パートナーを交えて意見交換。

●若者を地域に集めるには、ターゲットを意識した仕掛けが大切。

活動報告に続いて「全員参加の元気塾会議」を実施。第1のテーマとして、参加された各団体共通の悩みであり、全国のまちづくり活動において課題となっている「地域づくりの担い手となる後継者(若者)をどう集めるか」について意見交換を行いました。まず「ターゲットをどう呼び込むか」が第1の論点に。

岡崎氏は、ターゲットである若者の呼び込みが大切な理由として、高齢化よりもア



豊かな経験と知見をもとに、まちづくりパートナーは地域社会の夢実現のために尽力します。

2018年度 アドバイザリーボードメンバー およびまちづくりパートナーのご紹介

アドバイザリーボードは、優れた知見を持つ「まちづくり元気塾」のシンクタンクであり、実践を指揮するリーダー集団です。また「チーフパートナー」として皆さまと共に考え、共に行動します。まちづくりパートナーは、経験・実績とも豊かなパートナーで、支援団体の状況に応じて派遣される頼もしい助っ人です。これまでに40名におよぶ専門家が参加しています。

●は、アドバイザーボードメンバー ●は、プロフィール ●は、元気塾実績
プロフィール・実績は2019年7月現在、年度表記はすべて西暦。
◎はチーフパートナーとして支援されている地域

志賀 秀一氏 (株)東北地域環境研究室 代表 (宮城県仙台市)

●北海道北見市出身。北海道東北開発公庫(現・日本政策投資銀行)、観光施設「山寺風雅の国」常務取締役を経て、2001年から地域づくり・観光まちづくりに関するシンクタンク(株)東北地域環境研究室代表。各地の観光振興計画や道の駅をはじめとする交流拠点施設の計画策定などに係る。役職に内閣府地域活性化伝道師、東北風景街道協議会委員(国土交通省東北地方整備局)、尚絅学院大学客員教授、NPOシニアマイスターネットワーク東北地区担当ディレクターなど。

●◎06年度 宮城県大崎市◎07年度 岩手県岩泉町◎08年度 新潟県南魚沼市◎09年度 山形県南陽市◎10年度 新潟県上越市◎12年度 宮城県南三陸町◎13、14年度 宮城県登米市◎16年度 岩手県宮古市◎17年度 宮城県登米市◎18年度 新潟県胎内市・マスターコース2013、2014、2016、2017、2018

柳井 雅也氏 東北学院大学 教養学部 教授 (宮城県仙台市)

●大学院修了後、桐蔭学園高校教諭、UCLA大学留学、岡山大学文学部助教授、富山大学経済学部教授を経て2005年より現職。11年より学長室副室長、19年より地域構想学科長。2013～14年ケルン大学客員教授。役職に国土形成計画北陸圏広域地方計画懇談会委員、自立型地域創造研究会委員長(東北経済産業局)他。

●◎08年度 青森県つがる市◎09年度 新潟県糸魚川市◎10年度 岩手県二戸市◎16年度 新潟県新発田市◎17年度 岩手県花巻市◎18年度 岩手県大槌町・マスターコース2014、2015、2016、2017、2018

寺川 重俊氏 (有)寺川ムラまち研究所 代表取締役 (岩手県遠野市)

●まちづくりコンサルタントとして、全国の中山間地域や地方都市の都市計画、産業振興、中心市街地・集落活性化の実践を支援。特に住民参加、官民協働による地域の独自性を活かしたまちづくりを推進。現場に近い所で仕事することを目指し、大分県湯布院に10年間居住。現在は岩手県遠野市在住。役職に(一社)大阿仁ワークス理事他。

●07年度 秋田県北秋田市・08年度 山形県川西町・17年度 秋田県能代市・新潟県上越市・18年度 福島県湯川村、マスターコース2013、2016、2017、2018

稲葉 雅子氏 (株)ゆいネット 代表取締役 (宮城県仙台市)

●大学卒業後、医療用コンピューター会社勤務を経て、2000年に(有)ゆいネット[現・(株)ゆいネット]設立。11年に(株)たびむすび設立。19年より東北大学大学院経済学研究科博士研究員、地域計画と観光を研究。役職に宮城県行政評価委員他。

●18年度 岩手県大槌町

岡崎 昌之氏 法政大学 名誉教授 (東京都千代田区) [アドバイザーボード 座長]

●(財)日本地域開発センター企画調査部長、福井県立大学教授を経て、2001年法政大学教授。15年より名誉教授。北海道池田町・岩手県遠野市・山形県小国町・愛媛県内子町・大分県湯布院町・沖縄県読谷村などのまちづくりや計画策定に参画。地域づくり団体全国協議会会長・全国過疎連盟過疎対策研究会委員長・福島地域創生戦略有識者会議議長他。

●◎06年度 山形県小国町◎07年度 秋田県北秋田市◎08年度 山形県川西町◎09年度 福島県金山町◎10年度 山形県庄内町・12年度 岩手県陸前高田市、宮城県南三陸町◎14年度 福島県只見町・16年度 岩手県一関市、秋田県藤里町、福島県郡山市、新潟県新発田市・マスターコース2013、2014、2015、2016、2017、2018

橋立 達夫氏 作新学院大学 名誉教授 (千葉県千葉市)

●大学在学中より50年に渡り、民間研究機関勤務・研究所経営などを通して北海道から沖縄まで全国でまちづくりの現場に参画。2000年度作新学院大学教授、特任教授を経て17年より現職。役職に総務省地域力創造アドバイザー、地域活性化伝道師(内閣府認定)、とちぎ協働デザインリーグ理事他。

●◎06年度 新潟県南魚沼市◎07年度 福島県三島町◎08年度 岩手県花巻市◎09年度 秋田県仙北市◎10年度 青森県つがる市◎13、14年度 岩手県釜石市◎16年度 福島県郡山市◎17年度 新潟県上越市◎18年度 福島県湯川村・マスターコース2013、2014、2015、2016、2017、2018

菊池 新一氏 認定NPO法人遠野山・里・暮らしネットワーク会長 (岩手県遠野市)

●遠野市役所在職中に「道の駅 遠野風の丘」の立ち上げと運営、ショッピングセンター「とびあ」の再生で中心的役割を担う。早期退職後、2003年に遠野山・里・暮らしネットワークを設立。遠野型グリーンツーリズムなどの実践に携わる。役職に地域活性化伝道師(内閣府認定)、農林水産省ボランティア・プランナー他。

●08年度 山形県川西町・09年度 福島県金山町・10年度 山形県庄内町・12年度 岩手県陸前高田市・13、14年度 岩手県釜石市◎16年度 秋田県藤里町◎17年度 秋田県能代市◎18年度 宮城県東松島市・マスターコース2013、2014、2015、2016、2017、2018

役重 真喜子氏 花巻市コミュニティアドバイザー (岩手県花巻市)

●農家研修で出会った岩手県東和町の人と牛に魅せられ、1993年農水省を退職、定住。東和町・合併後の花巻市で教育次長、地域づくり課長、総務課長等を務め、2012年に早期退職後は岩手大学大学院で行政と地域コミュニティ関係を研究し、博士号取得。各地のコミュニティ組織の活動支援のほか、地元で“東和農旅”プロジェクトを立ち上げ、地域文化や歴史資源を活かした交流事業、若手育成などに取り組んでいる。19年4月より岩手県立大学総合政策学部講師。

●16年度 秋田県藤里町・18年度 新潟県胎内市・マスターコース2017、2018

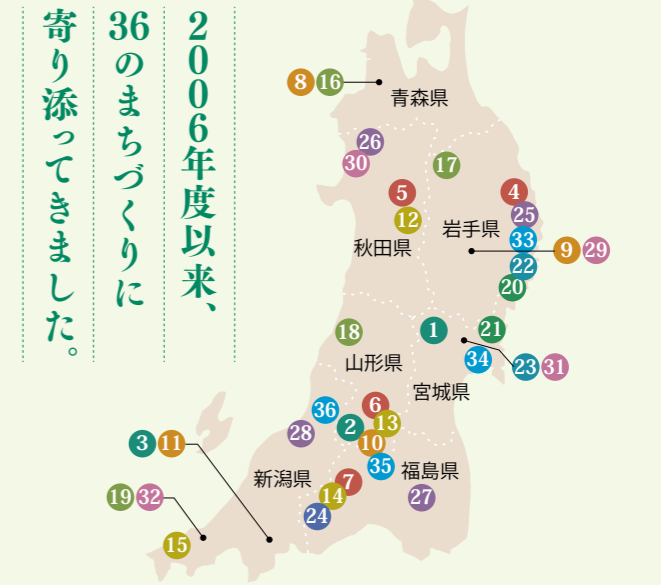
宮原 博道氏 (有)地域環境デザイン研究所 所長 (山形県東置賜郡高島町)

●大手建設会社で数多くの地域活性化プロジェクトを手がけた後、宮城大学事業構想学部教授として教鞭をとる。専門は建築学、都市開発、地域計画。特に都市や農村の活性化に向けたトータルプロセスを得意とする。役職に山形のみちづくり評議会委員他。

●18年度 宮城県東松島市

東北電力 地域づくり支援制度 まちづくり元気塾® 支援団体一覧

06年度	事例集V.O.1収録	1 宮城県 大崎市 鳴子温泉郷観光協会 テーマ：温泉を生かした大崎の「新しい観光」を考える
		2 山形県 西置賜郡小国町 小国町交流まちづくり研究会 テーマ：地域産業者のネットワークを生かした交流・体験プログラムの開発
		3 新潟県 南魚沼市 五十沢地区 テーマ：水など地域資源を生かしたまちづくり
07年度	事例集V.O.2収録	4 岩手県 下閉伊郡岩泉町 岩泉まちづくり連合 テーマ：来客の誘導で元気なまちづくり(岩手県岩泉町の活性化)
		5 秋田県 北秋田市 阿仁の暮らしを守り伝える山人の会 テーマ：郷土にある資源の再確認とそれを活用した地域再生運動
		6 山形県 西置賜郡白鷹町 中山地区活性化推進會 テーマ：白鷹町中山地区の活性化と持続可能な地域づくり
		7 福島県 大沼郡三島町 三島町エコ・ミュージアム協議會 テーマ：三島町エコ・ミュージアムの推進
08年度	事例集V.O.3収録	8 青森県 つがる市 つがる市商工会 テーマ：地域福祉に対応した中心市街地活性化
		9 岩手県 花巻市 美女のやきもちプロジェクトチーム テーマ：土澤(つちざわ)型コミュニティビジネスの展開検討
		10 山形県 東置賜郡川西町 かわにしツーリズム研究会 テーマ：農に関わり、農で暮らす～人にやさしい里山ステイネット～
		11 新潟県 南魚沼市 牧之通り組合 テーマ：“雪国しおざわ”らしい町並みをつくり交流人口を増し、「牧之通り」をブランド化する
09年度	事例集V.O.4収録	12 秋田県 仙北市 角館まちづくり研究所 テーマ：「賑わいのまち」への再チャレンジ
		13 山形県 南陽市 赤湯温泉ゆかい倶楽部 テーマ：花と灯りと温泉を生かした赤湯温泉大通りのまちづくり
		14 福島県 大沼郡金山町 横田地域を考える会 テーマ：過疎・高齢化が進む地域における住民主体の地域活性化
		15 新潟県 糸魚川市 糸魚川駅北まちづくり実行委員会 テーマ：北陸新幹線開業に向けた中心市街地活性化
10年度	事例集V.O.5収録	16 青森県 つがる市 多目的交流の場「あそびの学校」 テーマ：学童保育施設の持続的な運営と有効活用による地域の活性化
		17 岩手県 二戸市 岩涌坊クラブ テーマ：宝の山「稲庭岳」をもっと掘り起こそう
		18 山形県 東田川郡庄内町 庄内町グリーン・ツーリズムの会 テーマ：自然・人・産業などの地域資源を活用したグリーンツーリズムの推進による交流人口の拡大と地域の活性化
		19 新潟県 上越市 お馬出しプロジェクト テーマ：郷土の歴史を知り、誇りと愛情をもって行うまちづくり・まちとその住民が共に魅力を増し元気が出るまちづくり
12年度	事例集V.O.6収録	20 岩手県 陸前高田市 川の駅産地直売組合「あゆみ工房」 テーマ：産直で販売する新たな加工食品の開発・販売、仮設住宅入居者の生活支援
		21 宮城県 本吉郡南三陸町 「みなびい(南三陸ピープル)」 テーマ：参加者のレベルアップを図り、他地域との交流、参加者同士の情報交換を行い、次世代リーダー層の育成支援



13年度	事例集V.O.7収録	22 岩手県 釜石市 甲子柿を守る会 テーマ：地場産品「甲子柿」を活用した地域おこし
		23 宮城県 登米市 登米・南三陸フェスティバル テーマ：地域間連携の強化による魅力的なまちづくり
14年度	事例集V.O.7収録	24 福島県 南会津郡只見町 明和自治振興會 テーマ：「明和地区」の明日を考える
16年度	事例集V.O.8収録	25 岩手県 宮古市 宮古観光創生研究会 テーマ：岩手県宮古市における観光振興について
		26 秋田県 山本郡藤里町 特定非営利活動法人ふじさと元気塾 テーマ：共助の考えを生かして大学生と一緒に地域を支える仕組みづくり
		27 福島県 郡山市 柳橋町内会 テーマ：伝統芸能を核とした取り組みによる地域経済と文化の活性化
		28 新潟県 新発田市 一般社団法人新発田市観光協会 テーマ：寺町通りの「歴史資源」を活用しての賑わい創出
17年度	事例集V.O.9収録	29 岩手県 花巻市 農事組合法人湯の郷 テーマ：花巻温泉峡など地域資源を活用した観光と農業の連携
		30 秋田県 能代市 特定非営利活動法人能代観光協会 テーマ：地域資源を活用した滞在型観光の推進による能代市への誘客推進
		31 宮城県 登米市 とよま絆の会 テーマ：地域資源を活用した交流人口拡大につながるまちづくり
		32 新潟県 上越市 城下町高田花ロード実行委員会 テーマ：「花のまち高田プロジェクト」を通じた地域の活性化につながるまちづくり
18年度	事例集V.O.10(本誌収録)	33 岩手県 上閉伊郡大槌町 ままりば テーマ：ママの力で地域を元気にするプロジェクト
		34 宮城県 東松島市 有責任事業組合まぎ～らいん テーマ：特産物を活かし、交流人口を増やす元気な地域づくり
		35 福島県 河沼郡湯川村 勝常区環境保全會 テーマ：今後の勝常区のあり方について(農業基盤の充実を目的に基本的な構造改革の実施を図る)
		36 新潟県 胎内市 坂井活性化実行委員会 テーマ：美しい田園風景と美味しい里山の幸を活かした地域おこしモデル構築